

「お金で幸せは買えない」と言われるが、学術誌『サイエンス』に掲載された新しい研究によれば、他人のためにお金を使うのであれば、幸せは買える可能性があるという。

「お金の使い方をほんの少し変えるだけで、幸福度に違いが生まれる」と、マイケル・I・ノートン氏らとともに幸福に関する研究を率いたエリザベス・ダン氏は述べた。幸福に関する研究では、極端に貧しい場合を除いて、より多くのお金を得ることは、ポジティブな感情の驚くほど小さな増加にしか** (①) **ないことが長らく示されてきた。研究者たちは、おそらく人々がお金を持っていること自体ではなく、自分たちのために所有物を購入することに主に支出しているという「お金の使い方」に原因があるのではないかと推測した。

②<u>その研究</u>は、ボストン近郊の医療用品会社で行われた。そこでは従業員が平均約5,000ドルのボーナスを受け取っていた。研究者たちは、従業員がボーナスを受け取る前後の幸福度を測定した。ノートン氏によれば、判明したのは「受け取ったボーナスの額は幸福度とは無関係だが、他人のために使った金額は、その人がどれほど幸せであるかを予測させる」ということであった。

研究者たちは5段階の尺度を用い、「全体として、今どの程度幸せだと感じますか？」と質問した。用意された回答は「はい」「たいていの場合」「時々」「めったにない」「いいえ」の5つであった。ダン氏によれば、ボーナスの約3分の1を他人のために使えば、尺度上で1段階上の幸福度を期待できるという。彼女はこれを「向社会的支出」と呼んでいる。彼女は、ボーナスを受け取る前は二人とも「時々」幸せだと答えていたティムとダンの例を挙げた。もし④<u>ダンがボーナスの3分の1を「向社会的に」使い、ティムが全く使わなかったとしたら</u>、研究者たちの予測では、ダンは「たいていの場合」幸せだと答えることになるだろう。

この研究は、他人の助けをすることが自分自身を助ける最善の方法であるという、他の最新の研究ともよく合致している。より多く、より頻繁に他人を助ける人は、より幸せになる傾向がある。「他人に親切にすることほど利己的な行為はない」と、ハーバード大学で最も人気のある講義の一つであるポジティブ心理学の講師であり、『Happier』の著者でもあるタル・ベン・シャハー氏は述べている。ベン・シャハー氏は、その講義の週に、学生たちに5つの小さな親切を行うよう求めている。例えば、ホームレスの人々に惜しみなく施しをしたり、ウェ이터に親切にしたり、祖父母に電話をかけたりすることなどだ。「その効果は驚くほど顕著で、1日よりずっと長く続く」と彼は語った。

(⑧)、『サイエンス』誌の研究では、少額のお金を使うだけでも大きな結果が得られることがわかった。別の実験では、研究者たちが大学生に5ドルまたは20ドルのいずれかを与え、その日のうちにそれを使うよう指示した。自分のために使う(請求書の支払いや自分へのプレゼントなど)よう言われた学生もいれば、他人のために使う(寄付や誰かへのプレゼントなど)よう言われた学生もいた。学生の大多数は、5ドルよりも20ドルのほうが幸せになれるだろうと予想していた。

その日の夜、参加者の幸福度が測定された。しかし、やはり金額の多寡は関係なかった。自分のために使った人よりも、他人のために使った人の方が幸せを感じていたのである。「どんな状況でも、より多くのお金があればいいというわけではない、ということを示唆したいわけではない」とダン氏は言う。「ただ、私たちの研究では、人々がどのようにお金を使ったかが極めて重要だった、ということがわかった。実際、参加者が受け取った金額は、これら2つの研究において幸福度には何の影響も与えなかった」。

説明の一部として、人は所有物よりも経験によって幸せになる傾向があるからかもしれない、と『幸せの処方箋(The How of Happiness)』の著者、ソニア・リュボミアスキー氏は述べている。ア

アメリカ人は所有物にお金を使う傾向があるが、大きな家やテレビから得られる幸福感は、その利便性に慣れ、所有に伴う責任に直面するにつれて、すぐに減少してしまう。しかし、例えば友人をランチに連れ出すことは、より「経験」に近いものであり、より長く続く良い感情をもたらす可能性が高い。また、親切な行動をすれば、**「<u>社会的結果</u>」**がもたらされる、と彼女は言う。友情が深まったり、新しい友人ができたりするかもしれない。そして、人々はお返しに何かをしてくれるかもしれない。

では、なぜもっと多くの人が、他人のためにお金を使うことが幸福への確かな道であると気づかないのだろうか。一つの理由は、幸福を測るよりもお金を数える方がはるかに簡単だからかもしれない、とノートン氏は示唆する。「人生で成功することを考えれば、『去年はXドル稼いだが、今はXプラス10ドル稼いでいる』と言うことができる。しかし、人々は自分の人生を『去年は幸福度Xだったが、今はXプラス5だ』とは思えない。たとえ**（⑫）**、幸福感が高まった理由は彼らにとって明白ではないかもしれない」と彼は語った。

ダン氏は、この研究について執筆した際、クリスマスが近かったため、家族に物を贈る代わりに、人々が支援したい**<u>様々な慈善活動プロジェクトを選べる</u>**ウェブサイトのギフト券を贈ることに決めた。「家族に贈ったどのプレゼントよりも、ポジティブな反応が得られた」と彼女は言う。「私は彼らに『与えることの喜び』を贈っていたのだ」。

問1: 空所補充 (語彙・文脈)

正解: ② brings

・解説: 空所の直前は「より多くのお金を得ること (getting more money)」、直後は「ポジティブな感情の驚くほど小さな増加 (surprisingly small gains...)」となっている。「お金を得ることが、感情の増加をもたらす」という文脈にするのが適切である。

・選択肢の検討:

・takes (連れて行く、時間を要する) では意味が通らない。

・guides (案内する) も不適切。

・leads も「つながる」という意味で候補に挙がるが、その場合は leads to という形が必要である。よって、目的語を直接取る brings が正解となる。

問2: 内容理解 (研究の結果)

正解: ③ お金の使い道の違いが人の幸福度に与える影響

・解説: 下線部② (The research) が含まれる段落の後半に、「判明したのは、ボーナスの額 (金額) は幸福度と無関係だが、他人のために使った金額 (使い道) は幸福度を予測させる」と明記されている。つまり、幸福にとって重要なのは「いくら貰ったか」ではなく「どう使ったか」とあるという結論を指している。

問3: 文法 (強調の does)

正解: ② She does know the man you have just met there.

・解説: 下線部③の does は、直後の動詞 predict (予測する) を強調する強調の助動詞である。「(使い道が幸福度を) 本当に予測するのだ」という意味。

・選択肢の検討:

1. Not only does she sing...: 否定語句が文頭に出たことによる倒置の does。

2. She does know...: 動詞 know を強調する強調の does。これが下線部と同じ用法である。

3. smoking does nothing but harm: 「～をする」という意の一般動詞 (本動詞) の does。

4. He always does his best: 「最善を尽くす」という意の一般動詞 (本動詞) の does。

問4: 内容推論 (比較)

正解: ③ Tim would not be as happy as Dan.

・解説: 本文によれば、ボーナスを受け取る前、ティムとダンは二人とも幸福度が「時々 (sometimes)」であった。その後、ダンはボーナスの3分の1を他人のために使い (幸福度が上がると予測される)、ティムは全く使わなかった (幸福度は上がらないと予測される)。

・結論: ダンは「たいていの場合 (most of the time)」幸せになり、ティムは以前のまま、あるいはダンより低いランクに留まる。したがって、「ティムはダンほど幸せにはならないだろう」という比較の文が適切である。

問5: 指示語の内容

正解: ② the study conducted by Dunn and Norton

・解説: 第5段落の冒頭にある The study(下線部⑤)は、それまでの段落で詳しく説明されてきた「エリザベス・ダンとマイケル・ノートンが行った、ボーナスと幸福度に関する研究」を指している。

・文脈の確認: この一文は「(ダンらの)その研究は、他の最新の研究(ベン・シャハー氏の研究など)ともよく合致している」という文脈で、話の橋渡しをしている。したがって、直後に登場するハーバードの研究(ベン・シャハー氏)ではなく、それ以前の主たる研究を指すと判断するのが妥当である。